

## コンブレーの司祭のおしゃべり : 教会が位置する空 想の地図の変遷

加藤, 靖恵  
名古屋大学大学院人文学研究科 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/2556271>

---

出版情報 : Stella. 38, pp.23-36, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## コンブレーの司祭のおしゃべり\*

——教会が位置する空想の地図の変遷——

加 藤 靖 恵

『スワン家の方に』第1章「コンブレー」の数々の挿話は、作者プールの子供時代におけるイリエ（現イリエ＝コンブレー）での滞在により生み出されたことは自明であるが、コンブレーはあくまで小説のために創作された架空の村に過ぎないことも事実である。『ジャン・サントゥイユ』草稿で主人公が休暇を過ごす村はイリエの名をとどめているが、教会の描写は極めて簡潔である。一方で、中世キリスト教芸術を論じるラスキン、エミール・マールに感化された後で執筆された『失われた時を求めて』では、村の教会の外観や内装が詳細に描かれている。

レオニー叔母を訪問した際に、村の司祭は自分の教会について以下のように述べている——

サン＝チレルには参観するに値する箇所がいくつかありますが、とても古い部分が数カ所私の哀れなバジリカにもあるのですよ、この司教区で修復すらされていない唯一の教会なのですからね。いや、正面玄関は汚らしくて古くさいですが、言ってみれば荘厳さをそなえているのです […] [I, 102]

「バジリカ (basilique)」という語は、実在のイリエの小さな教会にはふさわしくない。ところが、コンブレーの教会には「ゲルマント卿、ジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンの直系であるジルベール・ル・モーヴェ」のステンドグラスや、テオドベールの初代教会の地下納骨堂が残されているのだ [I, 103-104]。

正面玄関の描写は草稿ではさらに詳しい。1909年秋の草稿では、旧教会を焼き払ったジルベール・ル・モーヴェが現教会を建立したとされる——

しかしオクターヴ奥様、それは11世紀のことなのです。そしてそれ以来私の教会は

建て直されたことがないのです。シャトーダンからレザンドゥリに至るまで、マントからリジューに至るまで、これほど惨めったらしく、古くさい正面玄関をもつ教会があるとは思えません。全く破壊され、カビが生え、この哀れな聖母像には腕がないし、ニッチにはゲルマンの領主たちやブラバン公たちの脚の部分しか残っていない〔…〕これらはユグノー教徒たちが破壊した彫像の残骸なのです〔…〕<sup>1)</sup>

この「11世紀の」建造物の描写には時代錯誤が含まれている。ヴィオレ＝ル＝デュックによると、ニッチが出現したのは13世紀初めであり、「ロマネスク時代の建造物には全く見られない」<sup>2)</sup>。複数のニッチと彫像が聖母マリア像を囲むように据えられたコンブレ教会の正面玄関は、むしろ12世紀初めに現れだした新しい様式を想起させる。イリエのサン＝ジャック教会は、百年戦争中に破壊され、15世紀にフロオン・ディリエによって11世紀の初期教会跡に建立されたものだ。正面玄関には、扉口中央の中柱に聖母像があるだけで、それ以外の彫像やニッチは見られない〔図版1〕。1904年出版のジョゼフ・マルキ著『イリエ』に収められた2枚の写真によると、この玄関の現在の状態はプールの時代から変わっていない<sup>3)</sup>。

最終稿で、司祭は「司教区内で唯一」この教会が「修復すらされていない」と明言しているが〔I, 102〕、これはもちろん実在のイリエの教会には当てはまらない。上に引用した草稿では、司教区内の比較対象として、4つの地名が挙げられている。そのうちマントは、イリエやシャトーダンと同じくシャルトル司教区にあったが、1822年の分割以後、ヴェルサイユ司教区の所属となる。レザンドゥリは実際にはエヴルー司教区、リジュはバイユー司教区であり、コンブレの司祭の言う「司教区」は架空の地理上のものであることが明らかである。

### 『失われた時を求めて』初期カイエにおける教会玄関の描写

司教による描写について、生成過程において興味深い試行錯誤が見られる。まず最も古い草稿では次のとおりである――

私の教会の正面限界は黒ずんで、汚らしく、最も貧しい教会にも望まれないような代物です。ドゥルーからレザンドゥリスに至るまで、コンブレほど重要でない土地の全ての教会の玄関が新しくなったにもかかわらず、私の教会の玄関には手が入らない

のは、あの哀れな聖母像のせいなのです、初代ゲルマント公フィリベール・ル・ボー戴冠の場面を表しているということですが、真偽はわかりませんが、というのも残っているのはその聖母像だけで、もう一方の彫像は破壊されているのですから、それでも私の教会の玄関が修復されない十分な理由となるわけなのです。<sup>4)</sup>

玄関が「黒ずんで、汚らしい」と最終稿よりも具体的に描かれているが、聖母像の破壊の度合いについては記述がない。この像は元々「初代ゲルマント公 (le premier prince de Guermantes)」の像と対をなしていたとある。『20世紀ラルース辞典』によれば「prince (大公, 公)」がフランス北部で用いられるようになったのは12世紀半ばである。フィリベール・ル・ボー (フィリベルト2世) は15世紀の実在の人物で、サヴォイア公、ピエモンテ公でもあった。コンブレーの教会玄関に元々彼の彫像があったとすると、15世紀に再建された実在のイリエのサン=ジャック教会と年代的に近くなる。ところが同じ草稿によると、ゲルマント家の系譜は10世紀に遡る。「初代ゲルマント卿のクロドアルド」がコンブレーをロコの襲撃から護ったという記述があるからだ<sup>5)</sup>。玄関にニッチがあるとは書かれておらず、この段階では彫像は上記の2体のみのようだ。コンブレーと比較される町の名前としてはここではドゥルーとレザンドゥリのみが挙げられる。

次に書かれた断片は、同じ草稿ノートの3ページ先である――

しかし11世紀のことですよ、シャルル奥様、それ以来私の教会は建て直されていないのです。ドゥルーからレザンドゥリにまたがる間に、これ以上惨めで、黒ずんで、カビの染みのついた正面玄関はありません。かなり古い上に、破壊されていて、哀れな聖母にはもはや腕はないですし、ニッチはどれも、大革命の時に壊されたゲルマントの領主たちの彫像の脚部をкаろうじてとどめている有様です。<sup>6)</sup>

教会の再建の時期が11世紀と明言されており、ニッチや彫像の数も増えている一方で、15世紀の大公の名前は引用されていない。

別の草稿ノートにさらに新しいヴァージョンが執筆される――

しかし11世紀のことですよ、シャルル奥様、それ以来私の教会は建て直されていないのです。ドゥルー=〈シャトーダン〉からレザンドゥリ、マントからリジューにまたがる間に、これ以上惨めで、カビの染みのついた正面玄関はありません。かなり古い上、破壊されていて、哀れな聖母にはもはや腕はないですし、ニッチはどれも、ユグノー

たちに壊されたゲルマントの司教たち 夫公たち〈領主たち〉、そしてブラバント公たちの彫像の脚部をかろうじてとどめている有様です〈ご存知のようにあの有名なジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンはゲルマント伯爵夫人の娘だったのです。一族の長女は今でも必ずジュヌヴェールと名付けられているのは、ジュヌヴィエーヴという名からきているのです〉。<sup>7)</sup>

レザンドゥリトリジューへの言及がここで登場し、ドゥルーの地名が削除されて、代わりにシャトーダンと行間に加筆される。ドゥルーはウール＝エ＝ロワール県の北端に位置するので、レザンドゥリ、マントトリジューとともにノルマンディー地方の一部、南北 50 キロメートル、東西 100 キロメートルの範囲のみを取り囲むことになる〔図版 2〕。シャトーダンはイリエの南 30 キロメートルに位置するため、この地名の入れ替えによって、司祭の会話で示されるの地域は、イリエが存在するウール＝エ＝ロワールも含んでより広範囲となる〔図版 3〕。

地理的な整合性に加えて、シャトーダンの選択は、司祭の言説の歴史的文脈にもより合致する。最後に引用した草稿では、ジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンを引き合いに出すことにより、教会の古い由来が強調される。ドゥルーのサン＝ピエール教会の建立は 13 世紀に始まったが、現在の建物の大部分は 15 世紀のものであり、ヴェルデュラン夫妻がオデットを伴った有名な王室礼拝堂は 19 世紀に建てられた [I, 287]。一方でシャトーダンには 12 世紀の教会がいくつも残る。中世の様相をとどめたこの町は、コンブレー住民にとって親しみ深い土地である<sup>8)</sup>。とはいえ、司祭の描写に一致する正面玄関を備えた教会はここにも見られない。地盤の悪いところに建てられたために主要部分の崩壊と再建が繰り返されたマドレーヌ教会の北正面には大革命前は 13 の彫像が飾られていたが、一体も復元されていない上、1733 年にアントワヌ・ランズロが公にした描写によると、そのなかに聖母像はなかった<sup>9)</sup>。南玄関は 12 世紀のままで保存状態がいいものの、人物像、怪物、種々の動物が彫られたアーキボルトがあるだけで立像は見られない〔図版 4〕<sup>10)</sup>。同時期の正面玄関を持つサン＝ヴァレリアン教会も同様である。

## エルスチールの蒐集家とノルマンディーの都市

ノルマンディー地方やイル・ド・フランスに重要な教会が数多いなか、この

挿話の草稿で引用された都市の選択はいかなる基準でなされたのだろうか。これに関連しうるのが『ゲルマントの方』中の短い挿話である。語り手はエルスチールの作品のうち、まだ自分が知らない絵画が地方に、例えば「レザンドゥリのある家に、彼の最も美しい風景画のうち一枚が」あることを知る [II, 424]。この箇所の草稿では、「~~ル＝アン~~〈マント〉の家」「マントモ〈ル〔ーアン〕レザンドゥリ〉のある家」というふうに、作者が地名を巡って躊躇したことを示している<sup>11)</sup>。この挿話の起源は『ジャン・サントウイユ』に遡る――

たったいま紹介された人の名前にジョンはまったく聞き覚えがなかった。その人はパリではなく、ルーアンに住んでいたのだ。それにしても、展覧会でモネの傑作を鑑賞した後、カタログでそれが「ルーアンのXX氏所蔵」とあるのを読めば、だれでも彼に共感を覚えるに違いない。<sup>12)</sup>

『ゲルマント家の方』の最終稿でも、レザンドゥリ在住の蒐集家にたいして、主人公は「重要なある主題についておなじように考える者同士の心情や性格までも結合させるような深い共感」に心を動かされるのを感じる [II, 424]。草稿中、ルーアンのかわりに、マント、レザンドゥリ、あるいは「L」で始まる地名が続げざまに書かれる。Lの後は書かれないままペンで消されてはいるが、リジュー (Lisieux) と書こうとしていた可能性はあるだろうか。

### リジュー、マントとレザンドゥリ

この3つの土地のうち、プルーストが実際に訪れたことがあるのはリジューだけである。夜の短時間の滞在の様子は1907年11月19日の『フィガロ』紙に発表された「自動車の旅路の印象」に描かれる。13世紀建立のリジューのサン＝ピエール教会の正面玄関の彫像はすべて破壊されており、プルーストが目したのは植物のモチーフの彫刻だった。ラスキンによるこの教会のデッサンによると、南門のタンパンの聖母子像は当時すでに取り除かれていた。現在リジュー歴史博物館所蔵のこの像は、草稿中のコンブレーの教会玄関の聖母像とは全く逆に、腕はのこされているが、頭部と下半身が破壊されている。プルーストはこの彫像は見えていないはずである<sup>13)</sup>。

マント＝ラ＝ジョリー・コレジアル教会正面玄関には立像は残されていないが、中央門のまぐさ石とタンパンには聖母の死、復活と戴冠を描いた浅浮き彫

りが見られる<sup>14)</sup>。1901年8月末に、ブルーストはロベール・ド・ビリーと共にこの町を訪れる計画をたてたが、健康上の理由で断念した<sup>15)</sup>。レザンドゥリの場合はさらに謎が多い。というのもわれわれが取り上げた2つの挿話以外でこの地名を引いた例は『失われた時を求めて』の最終稿にも草稿ノートにも<sup>16)</sup>、さらには作家の書簡にも存在しないからだ<sup>17)</sup>。ブルーストが愛読したエミール・マールの『13世紀フランス宗教芸術』にも、ラスキンの著作中にもこの町の教会には言及されていない。ただし後者が所蔵し、自ら赤インキで葉番号付けをしているターナーのデッサン帳には、この町の建造物を描いたものが数枚含まれてはいる<sup>18)</sup>。とはいえ、これをブルーストが閲覧しえた可能性はまずない。ニコラ・プッサン生誕の地であり、19世紀にも画家（ターナー、ピッサロ、シニャック）や詩人（ユゴー、ポール・フォール）にインスピレーションを与えたレザンドゥリには2つの教会がある。ノートルダム教会の正面玄関は13世紀の作品で、19世紀に修復された。中央柱には聖母像が据えられている。小アンドゥリにあるサン＝ソヴール教会の玄関も13世紀のものであるが、中央柱にあるのはキリスト像である。

### コンブレーの教会のモデルを巡って

コンブレー教会の「モデル」に関して興味深いのは、1918年4月に『スワン家の方に』の初版本を入手したジャック・ド・ラクテルのためにブルーストが書いた有名な献辞である――

〔コンブレーの教会の〕敷石がサン＝ピエール＝スール＝ディーヴから発想を得たのか、それともリジューだったか、それすらもおぼえていないのです。ステンドグラスのうちの何枚かはたしかにエヴルーのものですし、サント＝シャペルやポン＝トドメールのものもあります。<sup>19)</sup>

ここで挙げられた教会のうち、架空の正面玄関のモデルが存在するのだろうか。サン＝ピエール＝スール＝ディーヴ修道院の設立は11世紀である。その後には廃墟となり、少しずつ再建された。現在の教会は元の建物の跡地に13世紀から14世紀にかけて建立されたが、11世紀の要素がところどころに残されている。身廊北部では2箇所、壁の継ぎ目から小円柱と柱頭が覗かれ〔図版5〕、南側交差廊ではゴシック時代の壁のなかにロナネスク様式のアーケードが塗り込めら

れた痕跡も見られる〔図版6〕<sup>20)</sup>。コンブレーの教会の内部で、「粗野で野蛮な11世紀」が「彼の前に立ちふさがるように粹に身を寄せるゴシックの優美なアーケードによって隠されて」いるのと正反対である〔I, 61〕。しかしこのような例はフランスの他の教会にも見られる。サン＝ピエール＝スール＝ディーヴの教会の正面玄関の上部には16世紀のニッチがあり、そのなかの聖母像は19世紀の作である<sup>21)</sup>。

エヴルーの大聖堂はステンドグラスで有名であり、「コンブレー」のジルベール・ル・モーヴェのモデルとされるシャルル・ル・モーヴェを表したものもある。クロード・ヌ・ケマールによると、本論がとりあげる司祭の会話の草稿中、プルーストは幾度となくシャルルという名前を書いてはペンで消してジルベールの名に書き換えている<sup>22)</sup>。エヴルー大聖堂の西正面は13世紀のもので、19-20世紀に修復されたものの、彫像は全く再現されていない。プルーストは1907年9月に同じ町のもうひとつの教会、「ロマネスク様式とゴシック様式」が混在し、「美しいステンドグラス」で飾られたサン＝トーラン教会も訪れている<sup>23)</sup>。南正面玄関には13世紀の浅浮彫が残され、タンパンは4人の福音史家に囲まれる栄光のキリストが、まぐさ石には聖トーランの生涯が表されている。ポン＝トドメールのサン＝ウアン教会の建立が始まったのが15世紀末、パリのサント＝シャペルの聖母の玄関と最後の審判の玄関はいずれも1854年から1870年にかけてジェオフロア＝ドゥショームが新たに制作したものである。いずれも草稿より引用したコンブレーの教会の描写にはあてはまらない。

ところで、プルーストは11世紀当時のままの教会を実際に見たことがあるのだろうか。1907年8月のエミール・マール宛書簡には次のようにある――

私はカーンとバイユーとバルロアとディーヴに行きました。あまり疲れないようでしたらジュミエージュ、ポン＝トドメール、リジュー、サン＝ジョルジュ＝ド＝ボシエルヴィル、ファレーズ、サン＝ヴァンドリールにも行くつもりです。場所がどこかわかれば、スリジー＝ラ＝フォレにも行きたいです。<sup>24)</sup>

ケマールはジュミエージュの僧院をコンブレーの教会の主要モデルのひとつと考えている<sup>25)</sup>。この建造物は百年戦争の折、シャルル・ル・モーヴェによって焼き払われた。東端にあるノートルダム教会の西正面は11世紀のままであり、当時の簡素な様式で、装飾はない。ヴィオレ＝ル＝デュックによれば、教会の



玄関が彫刻で飾られるようになるのは12世紀初頭になってからであり、それまでは「装飾といえば彫形によるもの、レンガでできているか、壁画のほどこされたタンパンに限られて」いたのだ<sup>26)</sup>。

## 結 語

本論でとりあげた教会は、フランスの北西部の地図上で大きな円を描き、そのなかにイリエとエヴルーが位置する〔図版7〕。しかし、複数の彫像とニッチのある11世紀の玄関を備えた教会はそのいずれにも見つからない。ヴィオレル＝デュックが書いているとおり、そのような例は西欧の建築史上存在しえないことは、プルーストも自覚したのだろうか。清書原稿以降、これに関する描写は存在しない<sup>27)</sup>。架空の教会が中世に遡る由来をもつことを証明する役割は、正面玄関ではなく、内部の敷石によって担われることとなる――

同じ高さの敷石はふたつと無いにもかかわらず、コンブレー大修道院長たちやブラバン伯爵たちの墓石だという理由で取り替えることもできないのですよ。(ご存知のようにゲルマンの領主たちは大昔のブラバン伯爵の子孫であり、有名なジュヌヴィエヴ・ド・ブラバンはゲルマンの姫君だったので、一族の長女は常にジュムヴィエヴという洗礼名を与えられるのですよ)。<sup>28)</sup>

ブラバン伯爵がゲルマン家の祖先だという解説が、正面玄関の描写からこの箇所に移されている。

プルーストによる推敲は、この架空の教会の描写の年代的不整合だけでなく、地理的位置のあいまいさを解消することを目指しているようだ。この教会を複数の司教区をも含む巨大の円の中心に置く代わりに、最終稿では司祭は実在の4つの地名を引用せず、自らの司教区のことだけに言及する。とはいえ『失われた時を求めて』の地理的設定には謎が多い。アニック・ブイヤゲは、コンブレーにまつわる生成過程を「位置の曖昧化の歴史 (histoire d'une délocalisation)」と定義している<sup>29)</sup>。彼女によれば、『スワン家の方に』が1919年にガリマール社から再刊された折、数カ所でシャルトルがランスの地名に置き換えられ、コンブレーは実際のイリエの位置ではなく、最終的にシャンパーニュ地方にあるという設定に変わっている。メゼグリーズの野原に立つ主人公は、ジルベルトがよく行くというランから「何里もあるところに」いながらも、「途中で遮るも

のが全くないために」この距離も縮められているように感じる [I, 143-144]。大戦中メゼグリーズで8カ月にわたる大きな戦闘があった際（プレイアッド版註では、1916年のヴェルダンの戦いを連想させるとある [IV, 335 et n. 2]）。ジルベルトはドイツ軍から勇敢に城を守った。かくしてコンブレーの教会は、イリエの教会と建築的様相が異なるばかりか、最終的には地理的位置も遠ざかり、現実から自由に創造された記念碑として空想の地図の上に聳えるのだ。

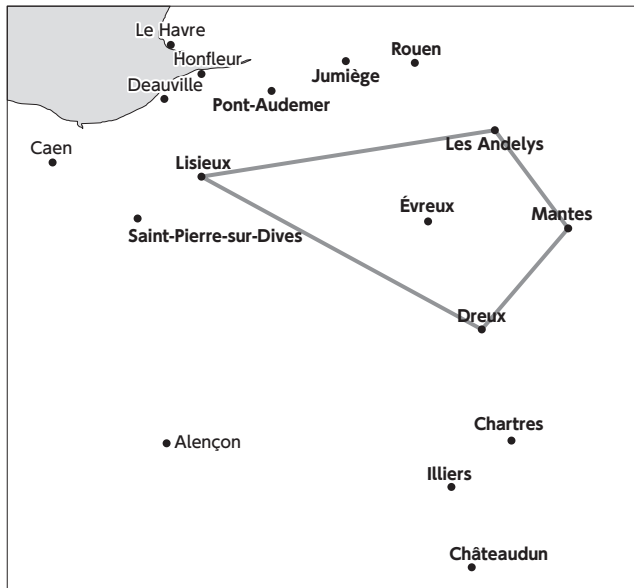
## 註

- \*) 本論は、2018年12月刊行の *Bulletin Marcel Proust* に掲載された拙稿 «Discours du curé de Combray: la métamorphose de la géographie imaginaire autour de l'église» を踏襲している。なお、以下において『失われた時を求めて』からの訳出引用はプレイアッド新版 (Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 1987-1989) に依り、該当箇所巻数および頁数を本文中 [ ] 内に示す。
- 1) Cahier 63 [automne 1909], f° 3 r°. プルーストの筆跡ではない清書原稿。
  - 2) Eugène VIOLLET-LE-DUC, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française*, Paris: A. Morel, 10 vol., 1867-1870, t. VI, p. 414.
  - 3) Joseph MARQUIS, *Illiers*, Chartres: 1904, pp. 188 et 193.
  - 4) Cahier 7, f° 3 r°. 以下、本文中の草稿転写と注釈は次の論考を参考にした—— Claudine QUÉMAR, «L'église de Combray, son curé et le Narrateur (trois rédactions d'un fragment de la version primitive de *Combray*)», *Cahiers Marcel Proust 6: Études proustiennes I*, Paris: Gallimard, 1973, pp. 277-342.
  - 5) Cahier 7, f° 4 r°.
  - 6) Cahier 7, f°<sup>os</sup> 6 r°-7r°.
  - 7) 草稿からの引用中〈 〉内は加筆部を表す。Cahier 8, f°<sup>os</sup> 64 r° et 63 v°.
  - 8) 例えば「コンブレー」の隣人であるゲービル夫人はこの町の店で絹のドレスを誂えたことが話題となる [I, 99]。
  - 9) Monique ROLLAND, *Châteaudun: capitale du Dunois*, Châteaudun, la Ville, 1986, pp. 52-53; Antoine Lancelot, *Description des figures qui sont sur la face de l'église de l'abbaye royale de la Madeleine de Châteaudun, tirée du 9<sup>e</sup> tome de l'Histoire de l'Académie royale des inscriptions et belles-lettres*, 1742, Impr. de Vve A. Knapen.
  - 10) Monique ROLLAND, *op. cit.*, pp. 53-54.
  - 11) Cahier 34, f° 21 r°.

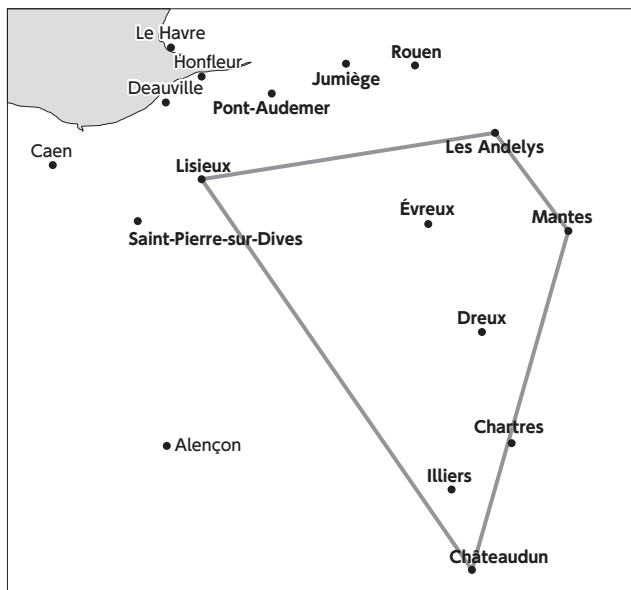
- 12) Marcel PROUST, *Jean Santeuil*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, pp. 890-891.
- 13) これについては拙論「プルーストとノルマンディー地方の教会——リジューとタオン」, 『ステラ』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 第36号, 2017年12月, 101-118頁を参照。
- 14) 拙論「プルーストとエミール・マール(2)——シャルトルとラン大聖堂における聖母の魂を運ぶ天使の彫像」, 『ステラ』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 第32号, 2013年12月, 196-197頁参照。
- 15) *Correspondance de Marcel Proust*, éd. de Philip KOLB, Paris : Plon, 21 vol., 1970-1993 [éd. abrégée ensuite : *Corr.*], t. II, pp. 442-443.
- 16) Akio WADA, *Index général des cahiers de brouillon de Marcel Proust*, Osaka : Osaka University (Graduate School of Letters), 2009.
- 17) *Index général de la correspondance de Marcel Proust : d'après l'édition de Philip Kolb*, établi sous la dir. de Kazuyoshi YOSHIKAWA, Kyoto : Presses de l'Université de Kyoto, 1998.
- 18) テート美術館所蔵 D23998 : Turner Bequest CCLIV (Tate), f<sup>os</sup> 44 r<sup>o</sup>, 50 v<sup>o</sup>, 51 r<sup>o</sup> et v<sup>o</sup>, 53 v<sup>o</sup>, 55 r<sup>o</sup> et 56 r<sup>o</sup> (ガイヤール城), 52 v<sup>o</sup> (ノートルダム教会), 57 v<sup>o</sup> (町の展望).
- 19) Marcel PROUST, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi de *Essais et articles*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, pp. 564-565.
- 20) Christian BOUILLIE, *L'Abbaye de Saint-Pierre-sur-Dives ; un riche patrimoine religieux normand à découvrir de sa fondation à aujourd'hui*, Lisieux : Les Éditions de l'Association Le Pays d'Auge, 2012, pp. 46-47.
- 21) *Ibid.*, p. 58.
- 22) Claudine QUÉMAR, *op. cit.*, p. 336.
- 23) *Corr.*, t. VII, p. 287.
- 24) *Corr.*, t. VII, pp. 255-256.
- 25) Claudine QUÉMAR, *op. cit.*, p. 336.
- 26) Eugène VIOLLET-LE-DUC, *op. cit.*, t. VII, pp. 386-387.
- 27) NAF 16703, f<sup>os</sup> 20-23 (プルーストの手による清書原稿；直筆で1から4と番号が振られたルーズリーフ)；NAF 16733, f<sup>os</sup> 145-147 (最初のタイプ原稿).
- 28) NAF 16703, f<sup>o</sup> 20 r<sup>o</sup>；NAF 16733, f<sup>o</sup> 146 r<sup>o</sup>. 最終稿との比較を参照 [I, p. 102].
- 29) Annick BOULLAGUET, «Combray entre mythe et réalités», *Marcel Proust 3 : nouvelles directions de la recherche proustienne 2*, textes réunis et présentés par Bernard BRUN, Paris-Caen : Lettres Modernes Minard, 2001, pp. 36-44.



図版1 イリエ=コンブレーのサン・ジャック教会の正面玄関（筆者撮影）



図版2



図版 3



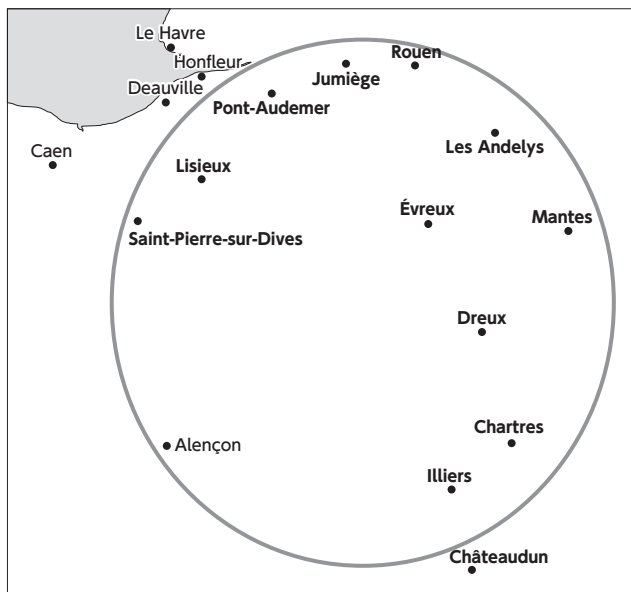
図版 4 シャトーダン、マドレーヌ教会の南門（筆者撮影）



図版5 サン=ピエール=スール=ディーヴ教会内部（筆者撮影）



図版6 サン=ピエール=スール=ディーヴ教会内部（筆者撮影）



图版 7